

さー着いたぞ、これからは自由だ。米を思いっきり好きになだけ作れるぞ！

「はい、そうですね」と静かにつるは答えた。

まだ開拓も進んでいない北の大地にやってきたのは、南部藩の下級藩士である林田勘三郎と妻のつる。

時は明治になる60年以上も前のことだ。江戸幕府となり200年の年月が過ぎ去った。

武士が武士として威張ることができるのは腰に差した刀があるからだ。それで日々の暮らしが豊かになる時代は実現しなかった。

そんなことよりも、日々の食べ物確保が一番重要になっているのが現実である。

そんな日々のなか、二人は南部地方を襲った「やませ」と呼ばれる大冷害の被害で、農村でも餓死する者が現れる悲惨なときに夫婦となった。

多くの犠牲者は老人と、将来の働き手となる子どもたちだった。

甘い新婚生活とは程遠く、米の収穫は皆無に近い状態で、これから訪れる前途多難な人生の幕開けが二人を待っていた。

勘三郎は代々南部藩の勘定方を務める下級武士を父にもつ林田家の三男として生を受けた。

だが、日々の生活は米をたらふく食べるにはほど遠い、質素な生活ぶりであった。

年貢として集めた配分があるが、民が草木をむしる姿を見るとなんとやりきれない気持ちになる。

そして秋が終わり冬が近づくと、雪が解け草木が芽生える春が恋しくなる。そう考えただけで肉体的そして精神的にも追い詰められていく自分の姿があった。

藩のお役目以外、冬のあいだは雪深い南部の地ではただただおとなしく静かにしているしか生き延びる術はなかった。

そんなある日、南部藩に出入りしている魚の行商人の世吉と話をした。

世吉は勘三郎に北の蝦夷の地は豊かであると話をした。

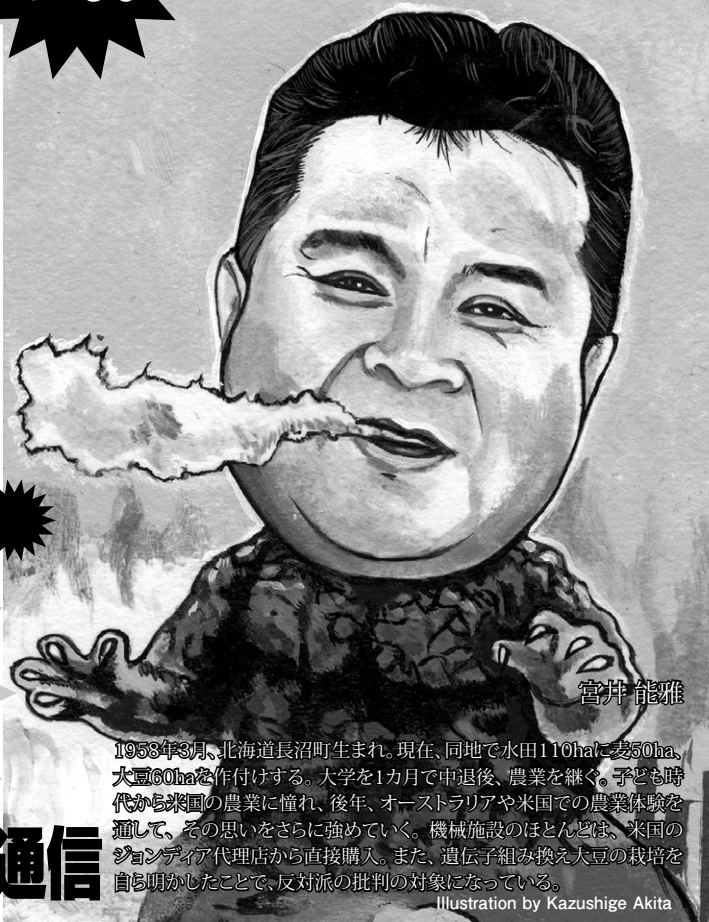
勘三郎は世吉に聞いた。世吉は「お前は魚の行商人なのに蝦夷に行ったことはあるのか」

「いいえ、私は津軽にも行ったことがない南部人です」

「では、なぜ蝦夷の地について詳し

## 第1話 蝦夷を望む

Vol.130



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

いのだ」

「はい、実は弟の安助が漁師をしていまして、以前、嵐にあつて蝦夷の地に漂流してしまいました」

「それで安助はどうなった」

「はい、自分の名前に安の名前があるので、ずーっと安心だと信じて運よく夏のころだったので、三月ほど住み着いたそうです」

勘三郎はまだ知らぬ蝦夷の話をする世吉の話にのめ

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

り込んでいった。

「食べ物はどうした」

世吉は待ってましたという顔をしてニンマリしながら

「鰯は取れるし昆布も取り放題、しけのときは海岸にホッキ貝と呼ばれる物があり、これに醤油を一滴たらすとこれまた美味なるものだそうです」

勘三郎は、漁師は海の上で魚を食べることもあるので味噌や醤油を持ち込むことを知っていた。

世吉はまくしたてるように「蝦夷の地は広いです。魚もとれるし米もたくさんとれます」といった。

勘三郎は驚いた。「それほど寒いのに米がとれるのか」

「はい、この耳で聞きましたから、土地が無限にあるので1町歩、いや10町歩も作ることができます」

勘三郎はその数字を聞いて驚いた。

蝦夷を見たい。だがまだ口にするには軽率すぎると考えた。

そんな様子を伺っていた世吉は「実はもっと旨いものがあるんですよ」と言った。

勘三郎は世吉にすーっと顔を近づけた。

「なんだ、それは」

世吉はなぜかためらうような仕事

を見せた。

そんな姿に勘三郎は強めな口調で

「早く教えよ」

重い口を開いた世吉は

「まあ、なんと言いますか、ここだけの話ですよ、誰にも言わないで下さいね」

勘三郎は渋る世吉にいらだちを見せながら

「わかった、わかった、早く言わぬか」

「はあ、くまでございます」「くまとは獣の熊のことか」

建前上、肉を食することは御法度となっていたが、現実には將軍は献上された近江牛を薬として食べていると聞くし、庶民もこっそり鹿、猪などは食していたが、勘三郎にとって熊を食するという話は聞いたことがなかった。

世吉は話を続けた。「現地では命がけて熊猟をするので、熊の肉は神に感謝するものとして扱われているそうです」

「誰がその熊の猟をするのだ」「アイヌと呼ばれる土人です」

「アイヌか、聞いたことがあるぞ、かなり凶暴な連中と聞いている」

世吉は予想外のことを口にした

「その凶暴なアイヌに弟は助けられたのです。漂流したときは羽織るものもなく、それを見かねたアイヌか

ら熊の毛皮をもらって着ていたそうです」

「言葉は通じるのか」

「全くダメですが、やはり以前に到来した者もいて、簡単な単語は通じるようでした。彼らがいなければ弟は生き延びることはできなかつたそうです」

勘三郎はますます蝦夷と呼ばれる北の大地にのめり込んでいった。

自宅への帰り道は民の苦悩している姿を見るが、今日に限ってその姿が目に入ってこなかった。決して現実の悲惨な状況を無視しているわけではないが、まだ見ぬ蝦夷話に浮足立っていたのだ。

家に帰り、妻のつるに今日あったことを話した。

黙って聞いていたつるにはいつものたわけ話にしか聞こえなかった。

一方的に話をする勘三郎は突然つるに聞いたですように言った。「蝦夷の地に行ってみないか」

つるは驚いた。

下級武士とはいえ、藩から私的な理由で遠出はできないし、親や兄弟が納得するはずがない。

そして毎晩、勘三郎は家に帰ると蝦夷の言葉を発していた。

つるはそんな蝦夷話に取りつかれた勘三郎にうんざりしていた。

つるは思わぬことを言った。

「あなた、ではその蝦夷に行きましよう」

勘三郎はまさかつるが了解してくれるとは思っていなかった。

「いろいろやらねばならぬことがあるな」

「そうですね、私の親は林田家に嫁いだときから諦めています、まずお父上の了解、ご兄弟、親せき筋も」

勘三郎はうん、うんとうなずくだけであった。

つるは大切なことを告げた。「南部藩から了解は取れますか。まして庶民ならまだしも南部藩士が国を捨てることなど許されるのでしょうか」

つるは一番難関なところは攻め落とせないだろうと思っていたので、勘三郎は諦めてくれると考えていた。

勘三郎はにやりと笑い、つるに言った。

「心配するな、妙案がある、きっとうまくいく」

呆れかえったつるは一言

「お好きにどうぞ」

目指す蝦夷の地はアイヌ語でイブトゥ。南部では、いふつ（現在の苦小牧から東側一帯地域）である。

ただ、その150年後に訪れる天災を知る者は誰もいなかった。(つづく)